「何かいるぞ‼」
　どん、と大地が震え、驚いた馬が嘶いた。
　倒木の振動。ネックが構える。状況を察したノランも、全身に魔力を漲らせて後方へ対した。
「どうなってるの？」
　慄きながらも、リアムはノアの手を取った。
「――来るぞ！」
　揺れていた茂みから、ドッ、と黒い塊が飛び出した。
　その塊――。
　――それは、巨大な狼のような生き物だった。
　全身から黒い煙を噴き、赤い瞳を輝かせて、包丁のような牙をむき出している。獰猛な唸り声を上げ、明らかな敵意を発しながら、ネックとノランをまっすぐに睨みつけていた。
「……邪獣……！」
　ノランが茫然とした顔で、
「こ、こんなところに……⁉」
　ガア、と邪獣が口を開ける。「ノラン！」と呼びかけると共に、ネックが馬車から飛び降りる。一秒も間を開けずにノランも地面へ着地する、
「出せ！」
　ノランの大声を受け、びくりと震えた御者が手綱を打つ。
　馬が嘶き、馬車が走り出し、
「ネック、ノラン！」
　二人から遠ざかっていくリアムが声を上げる。
　先に行ってろ、と答えるより早く、邪獣がネックへと飛び掛かった。ネックはすんでの所でそれをかわす。勢い余った邪獣は、生い茂る草を掻き分けて樹に激突した。
「こりゃあ」とノランは苦笑いで、
「厄介なもんに出くわしたな……！」
「ノラン」
　膝をついていたネックが態勢を整えながら、
「五秒だけ欲しい。守ってくれ」
　ネックの応答を受け、瞬時にその意味を理解したノランは、「十秒でも二十秒でもくれてやんよ」と頷いた。
　草の陰から、再び邪獣がのったりと二人の前に姿を現す。全身から噴いている黒い煙が勢いを増している。それこそ狼のようにグルルと呻き、今度こそネックの喉笛をかき切ろうと鋭い犬歯を剥き出した。
　どん、と邪獣が地を蹴り、疾風のようにもう一度ネックへと襲い掛かる、
　より早く、ネックの前にその身を滑らせていたノランは、地に両手のひらをつけて、魔力を思い切り解放した。
「土壁‼」
　魔力を帯びた地面はすぐさま硬い土壁として盛り上がり、邪獣からを守る盾となる。
邪獣は、頭から土壁に突っ込んだ。その盾の右方から半身を出したネックが、すっかり凝縮を終えていた手のひらの上の火球を正確に邪獣の目に打ち込んで、
「！」
　左目に火球を受けた邪獣は、空気を裂くような悲鳴を上げ、苦しそうに竿立ちした。ぶすぶすと焦げた左目から、血のような赤い炎が漏れる。
　ただ、視界の半分を奪われてなお邪獣の殺気は止まない。頭を振って土壁を破壊し、右前足を大きく振り上げ、目の前のノランに振り下ろそうとして、
「うわわっ！」
　ノランは魔力で土を盛り上げて、まばたき半分の速度で防御柵となるかまくらを作る。がん、と邪獣の爪が外壁を掻く。かまくらの中、邪獣の攻撃によってばらばらと崩れてくる土砂を腕で受けながら、ノランは自分のすぐ隣で身を小さくして魔力を溜めているネックを認め、ほんのわずかに笑って、
「頼むぜ、相棒！」
　ネックは邪獣から見て左方、邪獣にとっては失われた視界の方向へとかまくらから飛び出した。
「へへ、これで終わりだ！」
　と同時に右手から放たれていた新しい火球が、穴の開いた邪獣の左目を再度射抜いて脳天を破壊したと確信し、ノランは息を吐き、かまくらからゆっくりと出てきて、
「日頃の訓練の成果が出てるねえ」
　その確信は、間違ってはいなかった。　耳に痛い断末魔の叫びを上げ、どうん、邪獣が倒れた。
「ノランにしちゃ、まともな技の名前だったな」
　ノランは首の後ろに手を当てながら、
「俺も進歩してんのよ」
　音の満ちていた森が、静かになる。
　巨体を横たわらせ、びくりとも動かなくなった邪獣を前に、ネックは額の汗を拭って、
「……行こう」
　ネックとノランは、先を行くリアムとノアの馬車を追う。
　森を抜け、ゆるやかな傾斜のある小路へ出る。両脇に菜の花の咲き乱れる道で、一面の黄色が二人を誘うように揺れていた。
　空には相変わらず曇天が立ち込めていた。